



川の本流だけでなく、氾濫原の沼地でモリを用いた突き漁がおこなわれる



真昼に川で釣りをする老人。孫と自分の昼食のおかずだろうか

20人で約2時間の漁の成果。手前3匹はヒレナマス、奥はナギナタナマスの仲間



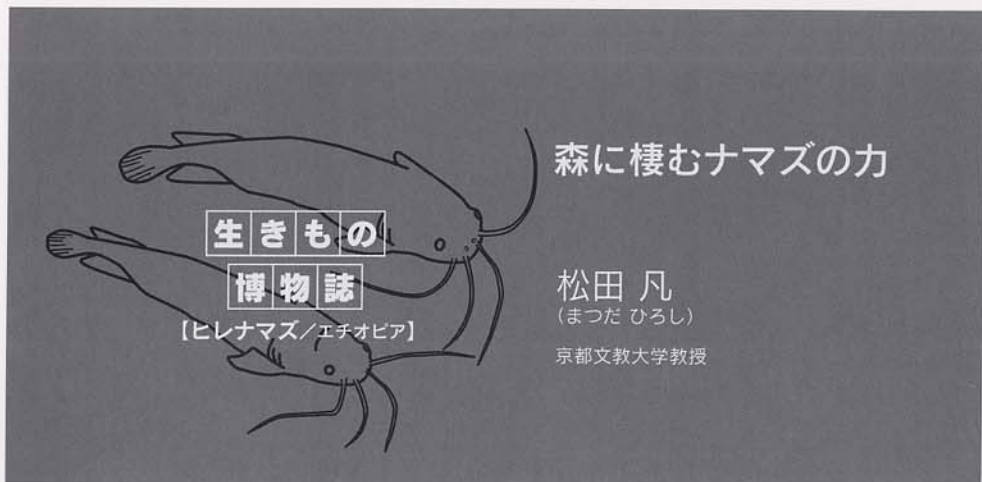
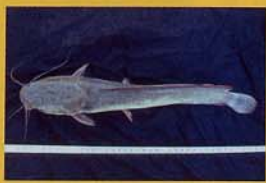
手前はヒレナマス、奥はポリプテルスで古代魚としても知られる。いずれも美味



乾季の川面を真っ黒に覆うように群れるドゥワダを釣り上げる。その姿は乾季の風物詩ともいえる

北アフリカヒレナマス (学名: *Clarias gariepinus* Burchell, 1822)

ナマス目(Siluriformes)は、両極を除く世界中に2000種以上いるといわれる硬骨魚類の一大集団である。オモ川にも多くのナマスが生息するが、ヒレナマス科(Clariidae)はヘテロプランクス属とクラリアス属が確認されており、後者のうちガリエピヌスはアフリカ大陸に広く分布する種で、最大1.5メートルにもなる。クラリアス属はアフリカンクララの名で産賞魚として日本でもよく知られている。また、いわゆる和名のヒレナマス(*Clarias fuscus*)は東南アジアから中国大陸にかけて分布し、石垣島でも繁殖しているほか、東京で食材として販売されている例もあるという。



森に棲むナマズの力

松田 凡
(まつだ ひろし)

京都文教大学教授

生きもの
博物誌

【ヒレナマス/エチオピア】

密接な結びつき

日本ではナマスというと、むかしはどここの河川や湖池にも見られたありふれた魚だった。近年では、そのユニークな姿がキャラクター・デザインになったり、また地震予知能力が科学的に検討されたりして、親しみを感じている人は多いようにみえる。

その反面、食用魚としてはあまり一般的ではないようだ。わたしは京都生まれの京都育ちで、現在は滋賀県に住んでいるが、ナマスを家で食べた記憶はない。だが、淡水魚の宝庫といわれるアマゾン川流域はもちろん、わたしの知るアフリカではまったく事情は異なる。食用としてはもちろん、日常生活や信仰のレベルで、わたしたちの想像を超える密接な結びつきが人とナマスとのあいだにはある。

成鯿のいのち

わたしがエチオピア西南部を流れるオモ川沿いの、ムグジ人の村に暮らしていたころ、人びとの主食である穀物(モロコシ)が底をつく季節になると、毎日魚しか食べるものがないので閉口した。四〇種以上いるオモ川の魚のなかでもっともポピュラーなのは、コエグ語でクワダと総称されるヒレナマスの一種である。肉が白身で淡泊なのはいいが味は頼りない。また、おき火で焼いて、手でむしって食べるのに最初は抵抗があった。通常は釣り針と糸を使い、また乾季にはモリを使って、簡単にしかも大量に捕れることもあって、一カ月あまりこればかり食べていた記憶がある。

少し大きくなって、ふくらはぎくらいの大きさのものをブルントウという。さらに大きなものを体長一メートル近くになるものもいる。さらにはワングナという。また、生殖期に沼にいて細長いタイフを特にシャルグワルとよぶ。ほかの魚種にも体の大小によってよびわけるものはいくつかあるが、さすがに四段階となるとクワダのほかにはなく、その観察の細かさに驚く。

生命力を受け継ぐ

数年前に、エジプト考古学の研究者から連絡をいただいた。紀元前三〇〇〇年ころ、古代エジプトを最初に統一した王の名をナルメルといい、ナルとは古代エジプト語でナマスの意味なのだそうだった。また紀元前一五〇〇年ころの新王国の時代には、洞窟壁画に頭部がナマス型をした神の姿が描かれているという。どうやらヒレナマスは人間の力を超えた、神聖な存在であったようだ。どうして古代エジプトの人びとはそう考えたのだろうか。

西アフリカのニジール川流域では、ヒレナマスが神話や口頭伝承に登場したり、食物禁忌の対象になったりしているようである。ムグジ社会では、特にクワダを崇めたりはしないが、その強い生命力と生殖力に言及されることはよくある。釣りあげて岸に放つておいても長いあいだ生きていて川に戻ろうと地を這う。乾季には沼地の泥のなかで空腹を堪え忍び、雨が降るのをじっと待っている、などといわれる。

しかし、頭骨以外の身体は極限までやせ細り、大きなオタマジャクシのようになったクワダを見たことがある。アフリカの熱帯の日差しを避け、いつ来るかわからない雨を待つ川辺林の泥沼で身を寄せ合うヒレナマスたち。モノを食べることは、栄養の観点だけでなく、そのモノがもっている生きる力と意志を受け継ぐことなのだと思っ